

英語習熟度による発音に対する 意識の違い

安藤 香織

1. 英語教育におけるコミュニケーション能力

様々な分野や領域でグローバル化が進むにつれ、英語が国際コミュニケーションツールとして使用される場面が増えている。その結果、英語教育（ESL/EFL）においても英語の構造ではなく、使用能力の習得が重視されるようになってきている（Jensen, 2008）。日本では1989年の学習指導要領改訂において、「コミュニケーション能力」という言葉が初めて用いられ、コミュニケーション能力の育成が目標に掲げられるようになった。その後、1999年の学習指導要領では「実践的」という言葉が加えられ、「実践的コミュニケーション能力」、つまり「コミュニケーションツール」として「使える」英語力の育成がさらに重視されることとなった。平成29年（2017年）及び平成30年（2018年）告示の学習指導要領の外国語編の「目標」をみても、「コミュニケーションを図る資質・能力」の育成が掲げられており、コミュニケーション能力の育成は、今日も日本の英語教育で重視されていることが分かる。

平成29年告示の小学校学習指導要領の外国語編の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外

国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す

(小学校学習指導要領 平成 29 年告示)

平成 29 年告示の中学校学習指導要領の外国語編の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す

(中学校学習指導要領 平成 29 年告示)

平成 30 年告示の高等学校学習指導要領の外国語編の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す

(高等学校学習指導要領 平成 30 年告示)

*下線筆者

「コミュニケーション能力 (communicative competence)」の概念は Hymes (1971) によって初めて導入された。Hymes (1971) は言葉を使用するには文法や語彙などの言語に関する知識だけでなく、言葉の社会における使用法を知ることが必要とし、それらをまとめて「コミュニケーション能力」

と呼んだ。コミュニケーション能力には言語に関する知識だけでは不十分とする Hymes の概念は Savignon (1972) や Paulston (1974) にも継承され、その後 Canale and Swain (1980) にも引き継がれた。Canale and Swain (1980) はコミュニケーション能力を「文法的能力 (grammatical competence)」と「社会言語的能力 (sociolinguistic competence)」の相互作用とし、これに「方略的能力 (strategic competence)」を加えた3つの能力がコミュニケーション能力を形作るとした。その後、Canale (1983) は「談話能力 (discourse competence)」を加え、コミュニケーション能力は「文法的能力 (grammatical competence)」、「社会言語的能力 (sociolinguistic competence)」、「談話能力 (discourse competence)」、「方略的能力 (strategic competence)」の4つの能力によって成り立つとした。この Canale (1983) の枠組みが、第二言語習得研究や外国語教育において大きな影響を与えており、また「コミュニケーション能力」の育成を初めて掲げた1989年の学習指導要領の理論的な土台になったと言われている。

2. コミュニケーション能力における発音

Canale(1983)のコミュニケーション能力を形成する4つの枠組みである、「文法的能力」、「社会言語的能力」、「談話能力」、「方略的能力」の名称だけをみると、発音の要素が含まれていないようにみえるかもしれない。しかし、ここで「文法的能力」と呼ばれるものは Hymes (1971) や Paulston (1974) が「言語的能力 (linguistic competence)」と呼ぶものであり、それには文法だけでなく、語彙や綴り、発音などの言語要素も含まれている。また、コミュニケーション能力を重視する際には、言語的な正確性は重視されないといった誤解を学生から耳にすることがある。しかし、Hymes (1971) らはコミュニケーション能力を身につけるには、言語的な能力だけでは不十分としているが、言語的な能力が必要ではないもしくは重要で

はないと言っているわけではない。実際、Canale (1983) は、コミュニケーション能力において、文法的能力、社会言語的能力、談話能力、方略的能力の順に重要としており、言語的な能力の重要性を強調している。

また、言語的な能力に含まれる文法、語彙や綴り、発音などの要素はどれも満遍なく身につけるのが理想的だが、特に発音はコミュニケーション能力において不可欠な要素と言える (Morley, 1991)。なぜなら、Darcy (2018, p.13) が「Spoken language is sound-and sound gives life to grammar and vocabulary. Without the sound (that is, the phonology, or the pronunciation), one cannot bring the rest of language to life.」と述べているように、どんなに正確な文法も、豊富な語彙力も通じる発音があつて、初めて意味を為す。同様に Fraser (2000, p.7) も、「...with good pronunciation, a speaker is intelligible despite other errors; with poor pronunciation, a speaker can be very difficult to understand, despite accuracy in other areas.」と述べ、発音の重要性を指摘している。

3. 自身の発音に対する自信

コミュニケーション能力において重要な役割を果たすとされる発音だが、日本人英語学習者の多くは自身の英語の発音に自信がないことが先行研究によって報告されている。野本・平塚 (2015) が大学生 151 名を対象に行ったアンケート調査では、84% が英語の発音に「あまり自信がない」または「全く自信がない」と回答した。また、大学生 33 名を対象に行った太田 (2012) では 81.8% が「自信がない (24.2%)」または「全く自信がない (57.6%)」と回答している。筆者が 2021 年 4 月に大学生 64 名を対象に行ったアンケート調査では、73.4% が「自信がない (29.8%)」または「全く自信がない (43.6%)」と回答した。同アンケートで「自信がある」と回答したのは、9.4% (6 名)、また「とても自信がある」と回答したのは 0.0%

(0人)であった。

4. 調 査

発音学習の研究においては、教師もしくは教職課程の大学生を対象とした意識調査（河内山他（2011）など）に比べ、学生を対象とした意識調査はその数がかなり限られる。しかし、Ellis（2008）が述べているように、教師の考え方が教室での活動内容や指導方法などに影響を与える一方、学習者の考え方は学習の進み具合や学習の結果に影響を与える。また Hand Nguyen（2021）は、教師と学習者の考え方が適合していると学習が促進され、より良い結果に繋がり得るが、足並みが揃っていない場合、学習の進み具合や結果に悪影響を及ぼす可能性があるとは指摘している。そのため、授業内での指導内容や方法を考える際には、教師の考え方だけでなく、学生の考え方についても把握し、意見の食い違いが生じている場合には必要に応じ適切に対処することが求められる。そこで、大学の通常英語授業において発音指導を導入することを目的に、学生の意識調査を行う。

4.1 調査目的

本調査の目的は、学習者の発音に対する意識および自主練習法を明らかにすることである。英語習熟度は自己効力感に影響を与えることが示唆されている（牧野、2013）。また大学の通常英語授業ではしばしば英語の習熟度に基づいたクラス編成が行われる。そのため本調査では、回答者をTOEICの取得スコアに基づき2グループに分け、英語習熟度別に回答結果を分析し、習熟度の違いによって、発音に対する意識や自主練習法がどのように異なるのかを調査した。

4.2 調査方法

都内私立大学2校の日本語を母語とする大学生111名を対象に、Googleフォームを利用しアンケート調査を行った。質問項目はNowacka(2012)の5項目を用いた。Nowacka(2012)の質問項目は英語で書かれているため、筆者が翻訳を行い、研究者2名によって確認・修正作業が行われた。翻訳の作成・確認作業を2021年6月に行い、調査を2021年7月に実施した。回答に要した時間は平均7分であった。調査の分析は、各質問項目に対するそれぞれの回答について、選択した人数の割合を算出した。

4.3 対象者

調査の対象は、都内私立大学に通う日本語を母語とする大学生111名(1年生73名、2年生32名、3年生6名)である。英語の習熟度別にグループ分けを行い、中級グループ(TOEIC:650点~750点)が59人、初級グループ(TOEIC:290点~450点)が52人となった。回答者は非英語専攻の文系学部にも所属しており、アンケート回答時に通常英語授業を週に1コマ以上履修していた。

5. 結 果

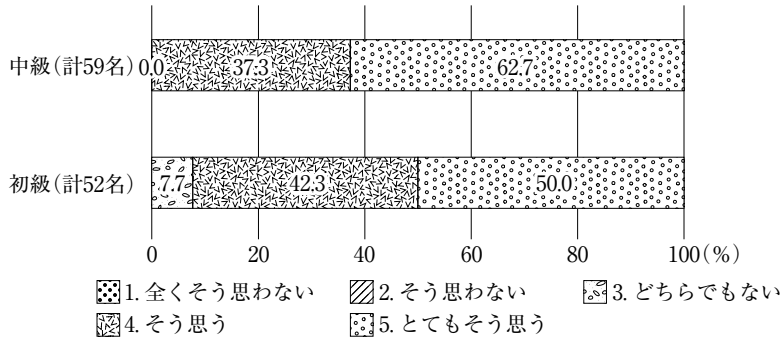
5.1 上手な発音を習得することの重要性

表1は「質問1.上手な発音を身につけることは自分にとって大切である」の全体の結果をまとめたものである。全体の96.4%([5.とても思う]):

表1 上手な発音を習得することの重要性

問1	平均	SD		1	2	3	4	5	合計
			回答数	全くそう思わない	そう思わない	どちらでもない	そう思う	とても思う	
	4.53	0.57		0	0	4	44	63	111
			%	0.0	0.0	3.6	69.6	56.8	100.0

図1 上手な発音を習得することの重要性（習熟度別比較）



56.8%、「4. そう思う」: 39.6%）とほとんどの回答者が上手な発音を身につけることを重視していることが分かる。また「1. 全くそう思わない」および「2. そう思わない」を選んだ回答者はともに0人であった。

次に質問1の結果を英語習熟度別に見ていく（図1）。初級グループでも中級グループでも上手な発音の習得を重視していることが分かる。初級グループは7.7%が「どちらでもない」と回答しているが、92.3%は肯定的な回答が占めており（「5. とてもそう思う」: 50.0%、「4. そう思う」: 42.3%）、上手な発音を身につけることを重視していることが分かる。また中級グループでは、全回答者が上手な発音を身につけることが自身にとって重要だとはっきりと肯定している（「5. とてもそう思う」: 62.7%、「4. そう思う」: 37.3%）。2グループ間に有意差は確認されなかった。

5.2 習得の目標

表2は「質問2. 学生は英語の母語話者のような発音を目指すべきである」の全体の結果をまとめたものである。全体の88.3%が肯定的な回答であり（「5. とてもそう思う」: 52.3%、「4. そう思う」: 36.0%）、否定的な回答はなかった。このことから回答者のほとんどは母語話者のような発音を目

表2 習得の目標

問2	平均	SD		1 全くそう思わない	2 そう思わない	3 どちらでもない	4 そう思う	5 とてもそう思う	合計
	4.41	0.69	回答数	0	0	13	40	58	111
		%	0.0	0.0	11.7	36.0	52.3	100.0	

標とすべきと考えていることが分かる。

次に質問2の結果を習熟度別に見ていく(図2)。初級グループ、中級グループともに、否定的な意見(「1. 全くそう思わない」および「2. そう思わない」)の回答はなく、肯定的な回答が大半を占めるが、平均は中級グループが4.63、初級グループが4.15であり、有意水準5%で検定を行ったところ有意差が認められた($t(93)=3.74, p<.001$)。内訳をみると中級グループでは、回答者の96.6%が肯定的な意見を示している(「5. とてもそう思う」: 66.1%、「4. そう思う」: 30.5%)。一方、初級グループでは、回答者の78.8% (「5. とてもそう思う」: 36.5%、「4. そう思う」: 42.3%)が肯定的な回答である。これは中級グループの割合に比べるとやや少なく、残りの21.2%は「3. どちらでもない」と回答している。

「質問3. 英語の母語話者のような発音で喋ろうと努めている」の回答を

図2 習得の目標 (習熟度別比較)

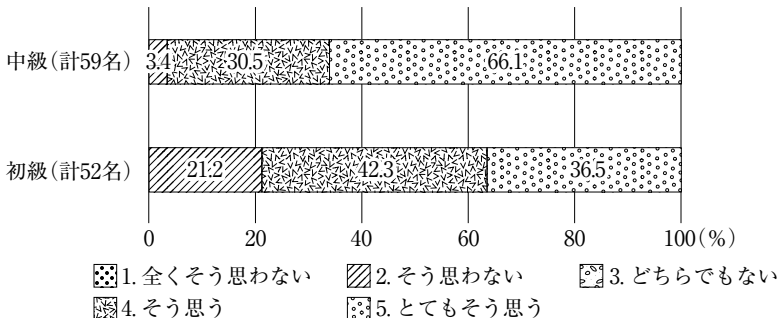


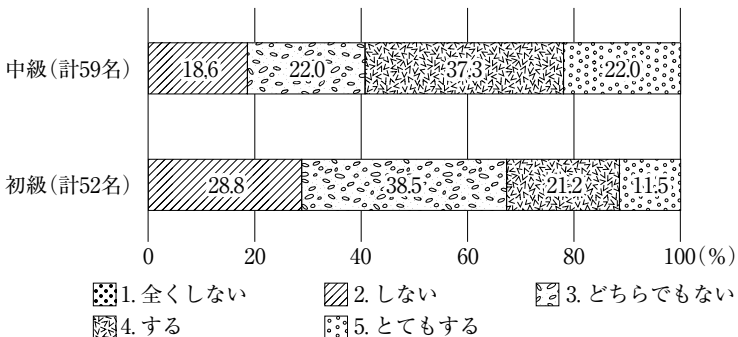
表3 母語話者の模倣

問3	平均	SD		1 全くしない	2 しない	3 どちらでもない	4 する	5 とてもする	合計
	3.41	1.03	回答数	0	26	33	33	19	111
			%	0.0	23.4	29.7	29.7	17.1	100.0

見ると、目標は母語話者の発音が望ましいと考えているが、話すときに英語母語話者の発音の模倣を意識している割合は大きくないことが分かる。表3は質問3の全体の回答をまとめたものである。全体の46.8%（「5.とてもする」：17.1%、「4.する」：29.7%）が話すときに英語母語話者のような発音を模倣することを意識していると回答したのに対し、23.4%は「しない」と回答している。また29.7%は「3.どちらでもない」と回答している。英語母語話者のような発音を目標と考えているが、自身が話すときにその模倣を必ずしも心がけているわけではないことが示唆された。

次に質問3の結果を習熟度別に見ると（図3）、初級グループ、中級グループの結果の内訳に違いが見られる。中級グループでは、回答者の59.3%（「5.とてもする」：22.0%、「4.する」：37.3%）が肯定的な意見を示しており話すときに英語の母語話者の発音を意識していることが分かる。一方、中級

図3 母語話者の模倣（習熟度別比較）



グループの 18.6% が「しない」と回答しており、目標は英語母語話者のような発音を掲げているが、自分が話す際には、英語母語話者の模倣は意識していないことが分かる。初級グループでは、回答者の 33.7% が肯定的な意見を示しており（「5. とてもしる」:11.5%、「4. する」:21.2%）、一方、28.8% が「しない」と回答し、回答者数が一番多かったのは「3. どちらでもない（38.5%）」であった。

5.3 発音上達のための自主練習

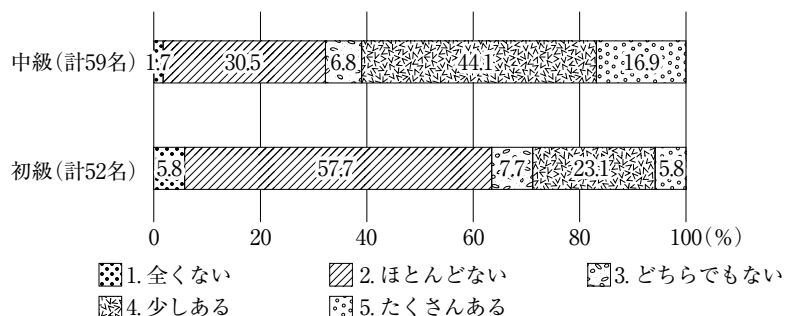
表 4 は「質問 4. 英語の授業内以外に自分で発音を上達するための取り組みをしたことがある」の全体の結果をまとめたものである。回答はほぼ二分化されており、全体の 45.9% は自主練習の経験があり（「5. たくさんある」: 11.7%、「4. 少しある」: 34.2%）、一方 46.8% は自主練習の経験に乏しいと答えた（「1. 全くない」: 3.6%、「2. ほとんどない」: 43.2%）。

次にこの結果を習熟度別にみていく（図 4）。2 グループ間でその内訳にかなりの違いがみられる。中級グループでは、61.0% が自主練習の経験があると答えたが（「5. たくさんある」: 16.9%、「4. 少しある」: 44.1%）、一方で、32.2% が自主練習の経験に乏しいと答えた（「1. 全くない」:1.7%、「2. ほとんどない」: 30.5%）。一方初級グループでは、自主練習の経験があると答えたのは 28.9%（「5. たくさんある」: 5.8%、「4. 少しある」: 23.1%）、63.5% は自主練習の経験が「1. 全くない（5.8%）」、「2. ほとんどない」（57.7%）」と答えており、初級グループでは中級グループに比べ自主練習

表 4 発音上達のための自主的な取り組み経験

問 4	平均	SD		1 全くない	2 ほとんどない	3 どちらでもない	4 少しある	5 たくさんある	合計
	3.07	1.18	回答数	4	48	8	38	13	111
		%	3.6	43.2	7.2	34.2	11.7	100.0	

図4 発音上達のための自主的な取り組み経験（習熟度別比較）



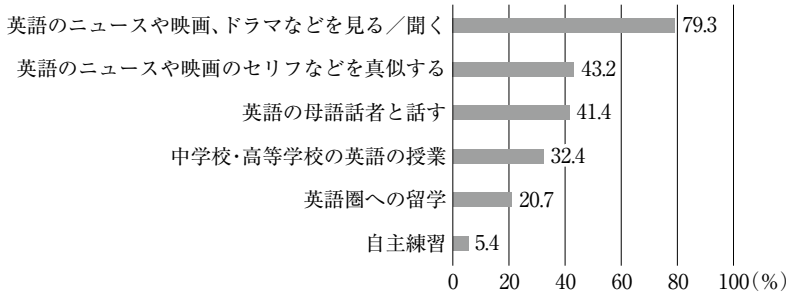
の経験に乏しいことが確認された。

5.4 発音の自主練習法

最後に質問5では自身の発音上達に役に立ったと思う取り組みをすべて選択するよう求めた。図5は全体の結果をまとめたものである。最も選択者が多かったのが、「英語のニュースや映画、ドラマなどを見る／聞く」で回答者の79.3%が自身の発音上達に役に立ったと答えた。次に選択者が多かったのが、「英語のニュースや映画のセリフなどを真似する」で43.2%であった。また「英語の母語話者と話す」が41.4%であった。選択者が最も少なかったのは「自主練習」(5.4%)であった。また今回の調査では「英語圏への留学」は20.7%の回答者であった。しかし、今回の回答者たちは新型コロナの世界的な流行により、2020年度および2021年度の海外留学プログラムの多くが中止もしくはオンライン留学に変更されており、留学を経験したことのある学生が少なかった可能性に留意する必要がある。

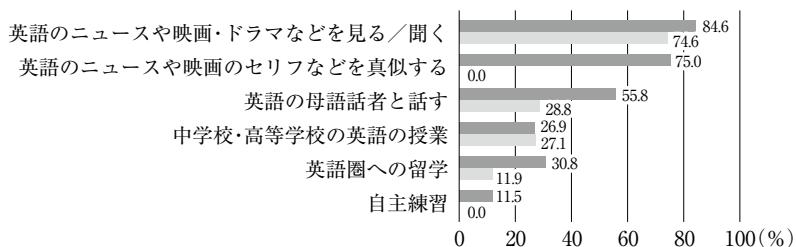
次にこの結果を習熟度別に比較してみると(図6)、両グループともに「英語のニュースや映画・ドラマなどを見る／聞く」ことによって、発音が上

図5 発音上達に効果があったと感じる練習法



達したと感じている割合が最も大きいことが分かる（中級：84.6%、初級：74.6%）。また両グループともに30%弱が「中学校・高等学校の英語の授業」によって発音が上達したと回答した（中級：26.9%、初級：27.1%）。一方、習熟度によって大きな違いが見られるのが、「英語のニュースや映画のセリフなどを真似する」、「英語の母語話者と話す」、「自主練習」である。英語ニュース等の模倣については中級グループでは、回答者の75%が効果を感じているのに対し、初級グループでは回答者はゼロであった。また英語の母語話者と話すことに対し中級グループでは55.8%が効果を感じているのに対し、初級グループでは28.8%であった。今回の調査では、初級グループではそもそも模倣をすること自体が少ないのか、もしくは中級グループと同じくらい模倣はするが効果を感じていないだけなのか判断することができない。同様に、初級グループが中級グループに比べ母語話者と話す機会自体が少ないのか、それとも効果を感じていないのか、今回の調査では判断ができず、追加の調査が必要である。また自主練習に対しても、中級グループの11.5%が効果を認めているのに対し、初級グループの回答者はゼロであった。また初級グループと中級グループの違いはその回答数にも見られた。初級グループでは回答数が1人あたり平均1.79件であったのに対し、中級グループでは1人あたり2.51件の回答が確認さ

図6 発音上達に効果があったと感じる練習法（習熟度別比較）



れた。

6. Teaching Implications

発音に対する意識調査の結果、英語習熟度に関係なくほとんどの回答者が上手な発音を習得することを重視しており、また英語の母語話者のような発音を目指すべきと考えていることが認められた。母語話者のような発音習得を望む学習者は多くの ESL/EFL 研究で確認されており、Nowacka (2012) においても、89% が母語話者のような発音を目指すべきと回答している。近年、コミュニケーションを主目的とする場合、発音目標には母語話者のような発音ではなく「通じる (intelligible)」発音が目標として掲げられることが多い。その背景には、外国語の発音習得には、学習者の年齢や、学習経験、モチベーション、教室外での目標言語の使用など、様々な要素が影響を与えること (Ellis, 2004)、そのため多くの学習者にとって母語話者のような発音は達成不可能であること (Kenworthy, 1987)、また「コミュニケーションツール」として使用することを主目的とする場合、必要なのは「通じる」発音であって、母語話者のような発音を目指す必要はないこと (Smith and Rafiqzad, 1979) が挙げられる。しかし、学習者がどのような発音モデルを希望するかには、学習者が持っている目標言語圏の文化や目標言語の話者に対する意識や、自己イメージなども関係しており、

単純に実現性や実用性で割り切れるものではない。よって、どのような発音モデルを目指すかは学習者の決定に委ねられるべきである。しかし、その際、教師には果たすべき役割があると考えられる。それは、様々な発音モデルの提示である。日本の中学校・高等学校の教科書ではアメリカ発音が用いられることが多く、多くの学生はアメリカ発音を「お手本」として学習している。また日本では日常的に英語に触れる機会は限られるため、そもそもアメリカ英語以外の英語に触れた経験が非常に乏しいということが考えられる。そこで、イギリス英語やカナダ英語など、他の英語を母語とする国で用いられている発音だけでなく、様々な言語を母語とする話者によって使用されている国際的なコミュニケーションツールとして使用されている英語の発音に触れる機会を増やすことで、様々な発音が存在していることに対する学生の気付きを促し、自分に必要な発音モデルを選ぶ際の選択肢を提供することが必要と考える。

また、発音上達の自主的な取り組みに関しては、英語の習熟度によって、取り組みの度合い、また効果を感じられた練習法にも違いが見られた。特に目を引いたのが、効果を感じられた練習法における習熟度による結果の違いである。中級グループに比べ優位に初級グループの回答割合が少なかったのが「英語のニュースや映画のセリフなどを真似する」、「英語の母語話者と話す」、「英語圏への留学」の3つである。この3つは、「英語のニュースや映画などの視聴」とは違い、学生に能動的な活動が求められる。「5. 結果」にも書いたが、これはそもそも初級グループではこれらの活動に取り組むこと自体が中級グループに比べて少ないのか、もしくは同じくらい取り組んでいるが効果を感じていないのかは、今回の調査では分からない。そのため追加の調査が必要である。そもそも取り組むこと自体が少ないのであれば、中級グループの75.0%が効果を感じている「英語のニュースや映画のセリフの模倣」に初級グループが消極的なのはなぜなのか、ま

た取り組んでいるにも関わらずあまり効果を感じられていないのならば、そのやり方に問題はないか、中級グループのやり方との違いを観察し、適切な指導を提供すべきと考える。

引用文献

- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J.C. Richards & R.W. Schmidt (eds.). *Language and Communication*, Longman.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, vol.1, 1-47.
- Darcy, I. (2018). Powerful and Effective Pronunciation Instruction: How Can We Achieve It? *CATESOL Journal*, vol.30(1), 13-45.
- Ellis, R. (2004). The definition and measurement of explicit knowledge. *Language Learning*, vol. 54, 227-275.
- Ellis, R. (2008). Learner beliefs and language learning. *Asian EFL*, vol. 10, 7-25.
- Fraser, H. 2000. Coordinating Improvements in Pronunciation Teaching for Adult Learners of English as a Second Language. DETYA (ANTA Innovative Project).
- Ha, X. V., & Nguyen, L. T. (2021). Targets and sources of oral corrective feedback in English as a foreign language classrooms: are students' and teachers' beliefs aligned? *Frontiers in Psychology*, vol. 12, 1-10.
- Hymes, D. H. (1971). On communicative competence. In J. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics*. Penguin.
- Jensen, J. C. (2008). "Focus on Form" and the Communicative Classroom. *近畿大学語学教育部ジャーナル*, vol.4, 75-89.
- Kenworthy, J. (1987). *Teaching English Pronunciation*. London: Longman.
- Morley, J. (1991). The Pronunciation Component in Teaching English to Speakers of Other Languages, *TESOL Quarterly*, vol. 25(3).
- Nilsen, T. S. (1996). *British and American English Pronunciation*. Universitetsforlaget.
- Nowacka, M. (2012). Questionnaire-Based Pronunciation Studies: Italian, Spanish and Polish Students' Views on Their English Pronunciation, *Research in Language*, vol. 10(1), 43-61.
- Paulston, C.B. (1974). Linguistic and communicative competence. *TESOL Quarterly*, vol. 4, 1-18.
- Savignon, S.J. (1972). *Communicative Competence: An Experiment in Foreign Language Teaching*. Center for Curriculum Development.
- Smith, L. E. and Rafiqzad, (1979). K. English for cross-cultural communication: the question of intelligibility. *TESOL Quarterly*, vol. 13.
- 太田かおり (2012) 「日本の英語科教育における音声指導の現状：初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して」『社会文化研究所紀要』69、53-73頁。
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝己 (2011) 「小中学校教員の発音指導に対する意識—アンケート調査による考察」『LET 関西支部研究集録』

13、57-78 頁。

野本直美・平塚紘一郎（2015）「e-Learning を用いた英語発音指導システム」『仁愛女子短期大学研究紀要』47、17-21 頁。

牧野眞貴（2013）「英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり」『リメディアル教育研究』8（1）、172-180 頁。

文部科学省（2017）『小学校学習指導要領 平成 29 年告示』。

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領 平成 29 年告示』。

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領 平成 30 年告示』。